

# チャーホフ 『中二階のある家 とある画家の話』

## 1 章

これは今から 6、7 年前、私が T 県のとある郡にあるベロクーロフの領地に住んでいた頃のことです。ベロクーロフは若く、随分と早起きで長手のコートを着ていて、毎晩ビールを飲んで私に対して「どこにいても誰にも理解してもらえないんだ」とこぼしたものでした。ベロクーロフは離れにある庭園に住んでいましたが、私は古い地主屋敷の、私が寝るための大きなソファ以外は何の家具もない円柱付きの巨大な大広間に住んでいました。そういえば私が一人占いをしていた机もありました。その大広間ではいつも、天気の良い時できえ、古いアモーフ式暖炉の中で何かうなるような音が聞こえ、雷のときなどは家中が震え、バラバラになってしまうのではと思えて、特に夜、大きな 10 か所の窓全てが突然稲光で明るくなる時などは幾分怖くもなったものでした。

毎日何もせずに過ごすことが自分の運命と思い、私は全く何もしていませんでした。何時間も窓から空や、鳥や、並木道を眺めたり、届いた郵便物に全て目を通したり、眠ったりしていました。時折家から出ては、夜遅くまでどこかをぶらつくこともありました。

ある日のこと、家に帰る途中に、私はどこかの知らない屋敷の敷地内にうっかり迷い込んでしまいました。太陽はもう隠れようとしており、咲き誇るライ麦畑には夕方の影が長く伸びていました。びっしり植えられた、とても背の高いモミの老木が 2 列、暗くも美しい並木道を作りながら、まるで一面の壁のように立っていました。私は垣根を軽々と乗り越えると、地面に 4、5 センチほど積もっていた針のようなモミの葉に足を滑らせながら、この並木道を歩き出しました。

あたりは静かで暗かったものの、高いところではあちこちで明るい黄金色の光がまたたき、それが蜘蛛の巣に注いで虹色に見えていました。針葉樹の葉がむせ返るほどに強く香っていました。それから、私はボダイジュの長い並木道の方へ向きを変えました。そちらにも荒れて朽ちた光景が広がっていました。足元では昨年の落ち葉が悲し気にかさかさとして音を立て、木々の間の薄闇には影が隠れていました。右側の古い果樹園では、不本意ながら弱弱しい声でコウライウグイスが鳴いていましたが、これもきっと年老いたウグイスに違いありませんでした。そこでボダイジュの並木道は終わりました。私がテラスと中二階のある白い家の脇を通り過ぎると、目の前には地主屋敷と大きな池のある光景が広がりました。その池には水浴び場があり、青々としたヤナギが群生していて、向こう岸にある村には細長い鐘楼があり、その上で沈みゆく太陽の光を受けて十字架が輝いていました。一瞬にして私の心はどこか懐かしくてよく知っているものに心惹かれるような気持ちで満たされました。まるで子どもの頃にいつだか全く同じ光景を見たことがあるかのように。

敷地から野原へ出るところにあった白い石造りの門は古く頑丈な造りで、一對のライオン像があり、門の近くには2人の女性が立っていました。年上の女性の方は、すらりとしていて、青白い顔をした大変な美人でした。ふさふさの栗色の髪を結い上げ、小さい口もとは強情そうで、きつい顔つきをしており、私にはほぼ反応を示しませんでした。もう1人の方は、まだうら若い女の子で、せいぜい17、8歳といったところでしたが、この子もすらりとしていて、顔色も青白かったが、大きな口に大きな目をしていました。私が脇を通ると、びっくりしてこちらを見遣り、英語で何か言って恥ずかしそうにしていました。可愛らしいこの2人を、私はずっと前から知っていたような気がしました。素晴らしい夢でも見ているかのような気持ちで、私は家へと戻りました。

それから間もなくして、ある日の正午に私とベロクーロフが家の近くを散歩していると、思いがけず、草をざわざわと鳴らしながら、屋敷にあの女性のうちの1人が乗るばね付きの幌馬車が入ってきました。乗っていたのは年上の方でした。彼女は寄付応募者名簿を持って、火事で焼け出された人達への支援を求めにやってきたのです。彼女は私たちと目を合わせず、とても真剣にそして事細かに、シャーノフ村で何件の家が焼けてしまったのか、何名の男女、子供たちが焼け出されたのか、そして彼女がその一員であった火事被災者委員会の活動に取り掛かるつもりであることを我々に語って聞かせました。私たちに署名をさせると、彼女は名簿をしまい、すぐさま暇乞いを始めました。

「ピョートル・ペトローヴィチ、私たちのことをすっかりお忘れになったのですね。」と彼女は手を差し出しながらベロクーロフに言いました。「我が家にお越しく下さいね。そしてもしムッシュN（彼女は私の苗字を呼びました）が、ご自身の才能を崇拝している人々の暮らしぶりを見てみたいなら、うちにお越しく下さい。そうしていただければお母さまも私もとても嬉しゅう存じます。」

私は頭を下げました。

彼女が去ったあとで、ベロクーロフが話を聞かせてくれました。ベロクーロフによると、あの娘は良家の子女で、名前はリディア・ヴォルチャニーノワといい、リディアが母親や妹とともに暮らしている領地は、池の向こう岸にある村と同じくシェルコフカというそうです。リディアの父親は、かつてモスクワで要職にあり、亡くなったときは三等文官の位にありました。相当な資産がありながら、ヴォルチャニーノフ家の人たちは、夏も冬も村から離れようとはせず、リディアは地元のシェルコフカの郡立小学校で教師をして、25ルーブルの月給を得ていました。自分のために使うのはこのお金のみであり、自活していることに誇りを感じているのだそうです。

「興味深い一家さ」と、ベロクーロフは言いました。「まあ、そのうち行ってみようか。君が行けば大喜びするよ。」

連休のある一日の昼食後に、我々はヴォルチャニーノフ家のことを思い出し、彼女たちに会いにシェルコフカに向かいました。母親と2人の娘たちは家にいました。母親のエカテリーナ・パーヴロヴナは、おそらく美しかった時期もあったのですが、今となっては歳の割にぶよぶよと太っていて病的な息切れがあり、悲し気でうつろながらも、私を絵画についての話

で楽しませようと努めていました。私がシェルコフカにやってくるかもしれないと娘から聞いて、エカテリーナは慌ててモスクワの展覧会で見た私の2、3点の風景画のことを思い出し、今、その絵で私が何を描きたかったのかを尋ねていたのです。リディアは、家ではリーダと呼ばれていましたが、私よりもベロクーロフと多く話をしていました。彼女は真剣に、微笑みもせず、ベロクーロフに彼が郡自治会の職につかない理由と、今まで一度も自治会の会合に出席していなかった理由を尋ねていました。

「いけませんわ、ピョートル・ペトローヴィチ」 彼女は責めるように言いました。「いけませんわ。恥ずかしいことですよ。」

「そうよ、リーダ、その通りよ」と母親が賛同しました。「いけませんわ」

「この郡はすっかりバラギンに牛耳られているわ。」と、リーダは私の方を向きながら続けました。「彼自身が郡の長官で、郡のあらゆる役職を自分の甥たちや娘婿たちに割り振って、やりたい放題なんですから。戦わなくては。若い人たちは、自分たちで強力な党を結成すべきだというのに、ここの方たちときたらどうでしょう。恥ずかしいわ、ピョートル・ペトローヴィチ！」

妹のジェーニャは、自治会の話をしている間、ずっと黙っていました。ジェーニャは重要な会話には加わることはなく、この家ではまだ大人として扱われずに、幼い女の子のようにミシュシと呼ばれていました。これは、幼い頃に自分の家庭教師を「ミス」と言えずに「ミシュシ」と言っていたからなんだそうです。ミシュシはいつも私のことを興味深そうに見つめては、私がアルバムの写真を眺めていると、「この人は叔父さん...この人は名付け親なの。」と説明し、写真を指差してくれるのですが、その間中、子どものように肩を私にすり寄せるので、私にはミシュシのまだ発達していない弱々しい胸元や、ほっそりした肩、おさげ髪、ベルトできつく締め付けられた痩せ気味な身体が間近に見えました。

私たちはクロケットやローンテニスをしたり、庭を散歩したり、お茶を飲んだりした後、長い夕食を取りました。壁に油絵もかかっていたいなければ、女中に「あなた」と呼びかけるような大きくはないけれど居心地の良いこの家が、円柱のある巨大な空っぽの大広間に次いで、何だか自分に合っているように思われ、リーダとミシュシがいるおかげで全てが若々しく純粋なものに感じられ、全てが礼儀正しさに満ちているように思われるのです。夕食の席で、リーダは再びベロクーロフと郡自治会やバラギン、小学校の図書館についての話をしていました。リーダははつらつとして、誠実で確固たる信念を持った女性で、話が長く、騒がしいくらいはあるものの、彼女の話聞くのは興味深いことだったのです。リーダは小学校勤めで話をするのに慣れていたからかもしれません。一方、学生の頃からあらゆる会話で議論をふっかける癖が抜けないうちのピョートル・ペトローヴィチときたら、退屈そうにのろのろ、長々と話し、明らかに自分が賢くて先進的な人物だと思われることを望んでいるのです。彼は身振り手振りをしながら、袖でソース入れをひっくり返してしまいテーブルクロスに大きなソースだまりができてしまったのですが、どうやら私の他には誰もこのことに気付いていないようでした。

私たちが家へ帰る頃には、外は暗くなっていて静かでした。

「育ちの良さっていうのは、テーブルクロスにソースをこぼさないことではなく、誰かがソースをこぼしても気付かないふりをするってことなんだな。」と、ベロクーロフは言い、ため息をつきました。「全く、立派なインテリ一家だよ。俺はああいう素晴らしい人たちから遅れをとってしまった、ああそうさ、すっかり遅れてしまったんだ！それというのも、いつも仕事、仕事！仕事だもんなあ！」

ベロクーロフは、模範的な農場経営者になりたかったら、どんなにたくさん働かなければならないかを語って聞かせました。ですが、私は内心こう思っていました。こいつは何て腰の重いろまな奴なんだ！と。何か真面目な話を始めるときは、緊張で「えー」を引き延ばすし、働きぶりにしても話しぶりと同様のんびりとしているから、いつも遅れてしまい、期限を過ぎてしまうのでした。ベロクーロフの実務能力を、私は全く信用していませんでした。それというのも、私が投函するよう頼んだ手紙を、何週間もポケットに入れたまま持ち歩いていたことがあったからです。

「何より辛いことはな」と、私と並んで歩きながらベロクーロフは言いました。「何より辛いことはな、どんなに働いても、誰にも分かってもらえないことさ。何一つ分かってもらえないんだ！」

## 2章

私はヴォルチャニーノフ家を度々訪れるようになりました。たいてい、私はテラスの低い段に座っていました。私は自分に対する不満でうんざりしたり、あっさりと、かつ面白みもなく過ぎ去っていく自分の人生を哀れに思ったりしつつ、苦しくなり始めた心臓を自分の胸から抜き出せたらどんなに良いだろうかなどと絶えず考えたりしていました。一方そんなときでもテラスでは会話がなされ、衣擦れの音が聞こえ、本のページがめくられていたのです。私は間もなく、リーダが日中病人を診察したり、本を分け与えたり、しばしば帽子をかぶらずに傘をさして村へ出かけていったりし、夜になると自治体や小学校について大きな声で話したりするのに慣れました。このすらりとして美しく、相変わらず手厳しいお嬢さんは、小さくて優美で輪郭のはっきりとした口を持っていたというのに、仕事に関する議論が始まると毎回私に不愛想にこう言ったものでした。

「あなたにとってこの話はずまらないでしょうけれど。」

リーダは私に好感をもっていませんでした。嫌われていた理由は、私が風景画家であり、民衆の困窮さを描こうとしなかったことと、リーダが固く信じている事柄に対して私が無関心であるように見えたからなのです。そういえば、バイカル湖のほとりを馬車で走っていたとき、ブラウスに青い木綿のズボンを履いた、馬に乗ったブリヤート人の女の子に出会ったことがありました。私はその子にパイプを売ってくれないかとたずねたのですが、まだ言葉を交わしているうちから、私のヨーロッパ風の顔だちや帽子を、女の子は軽蔑した眼差しで見つめていたかと思うと、たちまち私と話すことに飽きてしまい、「やっ！」と馬に叫びかけると走り去ってしまったのです。リーダもまさにそれと同じように、私のうちにある異質なものを軽蔑していました。私に対する反感を、リーダは決して表に出しませんでした。私の方ではそれを感じるため、テラスの下の階段に腰掛けていてもイライラしてしまい、医者でもないのに農民た

ちを治療するだなんて、それっていかさまですよねとか、2,000ヘクタールの土地があれば慈善家になるのも容易いでしょうね、などと口にしたものでした。

ところがリーダの妹のミシュシは何の気苦勞もしておらず、私のように全く何もせず生活を送っていました。朝起きると、ミシュシはすぐに本を手に取りテラスの深い椅子に座って足が地面に触れるか触れないかの姿勢で本を読むか、本を持ってボダイジュの並木道に隠れるか、門を越えて野原へ歩いていくかをしていました。ミシュシは一日中むさぼるように視線を本に落として読書をしていたのですが、彼女の頭が読書でいかに疲労していたのかを知りえるのは、彼女のまなざしが時々疲れて茫然として、顔がひどく青ざめていたからというだけなものでした。私がやってくると、ミシュシは私と対面してかすかに顔を赤らめ、読書を止めてその大きな目で生き生きと私の顔を見つめ、例えば、召使部屋で煤が燃え出したことや使用人が池で大きな魚を捕まえたことといった出来事を話してくれたものでした。平日、彼女はたいいてい明るい色のシャツと濃紺色のスカートを身に着けていました。私たちは一緒に、ワレーニエ用のサクランボを摘んだり、ボート遊びをしたりしたのですが、ミシュシがサクランボを取るために跳ねたり、オールを漕いだりすると、ゆったりとした袖を通して彼女のすらりとしてか弱い腕が透けるのでした。そして私がスケッチをしていると、ミシュシはすぐそばに立ちうっとりしてスケッチを眺めていたものでした。

7月末のとある日曜日の朝9時頃、私はヴォルチャニーノフ家を訪ねました。屋敷からやや距離をとりつつ庭を歩き回り、この夏に大変豊作だった白いきのこを探し出して、あとでジェーニャと取りに来たときのために、きのこの近くに目印を付けておきました。暖かい風が吹いていました。明るい色合いの晴れ着姿のジェーニャと母親が、教会から家へ帰るところが見えました。ジェーニャは風に飛ばされないように帽子を押さえていました。この後、2人がテラスでお茶を飲んでいるのが聞こえてきました。

毎日何もせずにいるための口実を探して生きている私のような呑気な人間にとって、この屋敷で過ごす夏の晴れやかな朝というのは、いつもこの上なく魅力的でした。まだ朝露に濡れている緑の庭が太陽の光を浴びて一面輝いて幸せそうに見えるとき、屋敷の近くでモクセイソウや夾竹桃が匂いたつ頃、教会から帰ったばかりの若い人達が庭でお茶を飲んでいて、誰もがとても素敵な服装をして楽しそうにしており、この健康的で満ち足りた美しい人たちが皆、長い1日をずっと何もしないで過ごすことが分かっているときなどに、私は人生が最初から最後までずっとこうだったらいいのにと感じてしまうのでした。現に今も私は同じようなことを考えながら庭を歩き回り、仕事も目的もないままに、一日中でもひと夏中でもこのまま歩き続けて過ごしてしまいそうでした。

ジェーニャが籠を持ってやってきました。彼女はまるで私に庭で遭遇すると知っていたかあるいは予感していたかのような表情をしていました。私たちはキノコを拾い集め、おしゃべりをしていたのですが、ジェーニャは私に何かを尋ねている間に、私の顔を見るために前に回り込んできたのでした。

「昨日、私たちの村で奇跡が起こったのです。」とジェーニャは言いました。「足の不自由なペラゲーヤは一年の間ずっと病に臥せっていて、どんな医者や薬も役に立たなかったのですけれど、昨日老婆がささやくと病気が治ってしまったのです。」

「大したことではありません。」と私は言いました。「奇跡は病人や老婆の周りだけに探し求めてはいけませんよ。果たして健康は奇跡といえないでしょうか？命そのものは？理解ができないものこそが奇跡なのです。」

「ところであなたは理解できないものが怖くはないのですか？」

「いえ。私は自分が理解できない出来事に対して、元気よく近づいて行きますし、身を任せることは無いのです。私はそうした出来事よりも高みにいるのです。人間は、ライオンやトラや星よりも、自然界の何よりも、理解できないものや、奇跡だと思えるものよりも高みにいると考えなければ、そいつは人間ではなく、何でも怖がるネズミということになってしまいますね。」

ジェーニャは、私が芸術家として非常に多くのことを知っていて、知らないことであっても正確に見抜くことができるのだと思っていました。ジェーニャは私に対し、永遠の美の領域や高次元の世界へと自分を導いてほしいと思っているところがあり、なんでも彼女は私をそうした世界の住人だと考えているためか、神や永遠の命、奇跡について、私と語りました。私の方でも、私や私自身の想像力が、死後永遠に失われてしまうことを容認しがたかったので、「そうです、私達人間は不滅です。」とか「そうです、私たちを待ち受けているのは永遠の命です。」と、答えていました。一方、ジェーニャは耳を傾けて、私の言うことを信じ、証拠を求めてきませんでした。

屋敷への帰り道、ジェーニャは不意に立ち止まって、こう言いました。

「姉のリーダは素晴らしい人なの。そうでしょう？私はリーダが大好きだから、リーダのためならいつだって命を差し出せるの。だけど」と、ジェーニャは指で私の袖に触れました。「どうして貴方はリーダと言い争いばかりするの？なぜイラついたりするの？」

「それは、お姉様が間違っているからです。」

ジェーニャは首を横に振り、その目に涙を浮かべていました。

「どうしてなのかわからないわ！」と、ジェーニャは言いました。

この時、リーダはどこからか帰宅したばかりで、玄関のそばで鞭を手に立っていて、すらりとして美しく、日に照らされ、何かを用人に言いつけていました。せかせかと大声で話をしながら、リーダは2,3人の病人を診察し、その後仕事のことで気をもんでいる様子で、あちらこちらの洋だんすを開けながら部屋の中を歩き回り、中二階へと消えていきました。リーダは食事を取るようと呼び出されていたのですが、彼女がやって来た時には既に私たちがスープを飲み終えたところでした。何故かこれらの細々としたことを私は覚えていて、また愛着を持っていて、特にこれと言ったことは起こらなかったにも関わらず、この1日の全てをありありと記憶しているのです。食事の後、ジェーニャは深い椅子に横になりながら読書をしていましたが、私はテラスの低い段に腰かけていました。私たちは黙っていました。空一面を雲が覆い、弱い雨がぽつりぽつりと降り始めました。暑く、風はもう長いこと穏やかに吹いていて、この日が終わることはないかのように思われるのでした。テラスにいる私たちのところに、扇を持って眠そうなエカテリーナ・パーヴロヴナが出てきました。

「ああ、お母さま」とその腕に口づけをしつつジェーニャが言いました。「昼間に寝ているなんて身体に障りますよ。」

この2人はお互いのことが大好きでした。1人が庭へ出ていなくなってしまうと、テラスにいる方が、早くも木立を見渡しながら、「ねーえ、ジェーニャ！」とか「お母様、何処なの？」などと呼びかけるのです。2人はいつも一緒にお祈りをして、同じように信仰心を持ち、黙ったままでもお互いのことをよく分かっていました。それに、他の人に対する態度も2人とも同じでした。エカテリーナ・パーヴロヴナもすぐに私に慣れて親しくなり、私が2、3日姿を見せないと、使いをよこして私が元気かどうか確認しました。私のスケッチをエカテリーナ・パーヴロヴナも感嘆の声を上げながら見ていたし、ミシュシと同じくらいおしゃべり好きで隠し事なしに何が起こったのか話してくれたり、よく家庭内の秘密も打ち明けてくるのでした。

エカテリーナ・パーヴロヴナは自分の長女に対して畏敬の念を抱いていました。リーダは決して甘えることなく、真面目な話しかしませんでした。リーダが自分だけの特別な生き方をしていたので、母親にとっても妹にとってもリーダは神聖で、いささか謎めいた存在であり、それはさながら、水兵たちにとって、常に船室にいる提督がそうであるのと同じでした。。

「うちのリーダは素晴らしい人間ですよ。」としばしば母親は言いました。「そうではありませんこと？」

そして今、雨がぽつりぽつりと降っている間も私たちはリーダについて話していました。

「リーダは素晴らしい人間ですよ。」と母親は言い、驚いて周囲を見回しながら悪だくみの相談をしているような調子の小声でこう言い添えたのです。「まあ、私は少し不安になりつつあるのですけれど、こんな人物には滅多に出会えないのですよ。小学校、救急箱、本・・・これらはどれも結構ですけど、どうしてそこまでするのでしょうか？リーダはもう24歳を迎え、自分の身について真剣に考える時期に来ているのです。こんな風に本や救急箱に気をとられて、人生がどう過ぎ去っていくかを見ようともしない・・・結婚しなくては。」

ジェーニャは本の読みすぎで顔が青ざめていたのですが、たるんだ髪型のまま顔を上げると、独り言でも言うように母親を見てこう言ったのです。

「お母さま、全ては神の御心のままに、ですよ！」

そしてジェーニャはまた読書に没頭しました。

ベロクーロフが、刺繍の入ったシャツに薄手のコートを着てやってきました。私たちはクロッキーやローンテニスをして、そのあと暗くなると長い時間をかけて夕食を取り、リーダは再び小学校のことや郡全体を牛耳っているバラーギンのことを話していました。その夜ヴォルチ

アニーノフ家を後にしつつ、長い長い何もない一日だったという印象を抱くとともに、どんなに長くても、この世の全てには終わりがあるのだと悲しい気持ちになりました。私たちを門のところまでジェーニャが送ってくれました。ジェーニャと一日中朝から晩まで過ごしたからなのか、ジェーニャがいなかったら寂しいだろうな、この愛おしい一家が自分にとって近い存在だ、と感じました。それゆえ、この夏をとおして初めて、絵を描きたいという気になりました。

「どうしてこれほどまでに退屈で、彩りのない生活をしているんです？」ベロクーロフと一緒に帰る道すがら、私は彼にたずねました。「私の人生は退屈で重苦しくて単調ですが、それは私が画家で風変わりだからですし、若い頃から嫉妬や自分に対する不満、自分の仕事に対する自信のなさに苛立っているような、常に貧乏な風来坊だからですけど、貴方はどうなんですか？貴方は健康でまともな人間だし、地主で貴族じゃないですか。どうして人生を楽しもうともせず、人生から何か得ようとしらないのでしょうか？例えばですが、なぜ今までリーダかジェーニャに恋をすることもなかったんでしょう？」

「俺が違う女を愛しているのをお忘れかな。」と、ベロクーロフは答えました。

ベロクーロフが語ったのは、彼と一緒に離れに住んでいるリュボフ・イワーノヴナという女友達のことでした。この丸々と太っていて尊大で、太らされたガチョウに似たこの淑女が、ロシア式のいでたちで首飾りを付けて日傘をさして庭を散歩していると、女中が引切り無しに彼女に何か召し上がりませんかとかお茶はいかがかなどと呼びかけているのを私は毎日見ていました。3年ほど前にリュボフはダーチャの敷地内にある離れの1棟を借り、そうしてベロクーロフのそばに、私の思うところでは永遠に住み着いたのです。リュボフはベロクーロフよりも10歳ほど年上で、彼がしばらく家を空けるときなどは彼女に許しを請わなければならなかったほどに彼を厳しくしつけていました。リュボフはしばしば男のような声で泣き、そんな時私は彼女のところに使いを出し、彼女が泣きやまなければ下宿から出ていくと伝えたものでした。そうすると彼女は泣きやんだものでした。

私たちが家に就くと、ベロクーロフはソファに腰かけ、しかめっ面で考え事をし、私はまさに恋をしているときの静かな興奮を味わいながら大広間を歩き始めました。私はヴォルチャニーノフ家の人々について話したくなりました。

「リーダが愛せそうな人は、彼女と同じくらい病院や学校に熱心な自治会の活動家だけでしょうね。」と、私は言いました。「もちろん、あんな女性のためなら自治会の活動家になったっていいですし、それどころかおとぎ話に出てくる鉄の靴を履き潰したっていいくらいです。それに、ミシュシは？あのミシュシって子は何て素晴らしいんだろう！」

ベロクーロフは、「えー」と引き延ばしながら、長々と時代の病であるペシミズムについて話し出しました。ベロクーロフの口調は自信に満ち、まるで私と議論しているかのような口調でした。何百キロと変わらない荒涼とした焼け野原でさえ、座り込んでいつ立ち去るともしれずに喋るこの男ほど憂鬱な気持ちにさせることはなかったでしょう。

「問題は、ペシミズムでもオプティミズムでもありませんよ。」私はイライラしながら言いました。「問題は、100人中99人が馬鹿だってことです。」

ベロクーロフは自分のことを言われたと思って、腹を立てて行ってしまいました。



### 3 章

「マロジョーロヴォ村に公爵がいらしてて、お母様によろしくですって。」何処からか帰ってきたリーダが手袋を外しながら母親に言いました。「面白いことをたくさん話して下さったわ...マロジョーロヴォ村の救護所の件については、郡の会議で再度提案すると約束して下さったけれど、望みは薄いそうなの。」そして私の方を振り返ると、こう言いました。「ごめんなさい、いつも忘れてしまうけど、貴方にはこんな話面白いわけありませんわね。」  
私は苛立ちを覚えました。

「面白くないとは、またどうしてです？」私はそうたずね、肩をすくめました。「私の意見など聞きたくもないでしょうけど、私はこの問題に興味津々です。本当ですよ。」

「本当ですか？」

「本当ですとも。私の考えではマロジョーロヴォ村には救護所は全く必要ありません。」私の苛立ちがリーダに伝わったのか、リーダは目を細め私を睨むと、こうたずねてきました。

「では何が必要ですか？風景画かしら？」

「風景画も必要ありません。あそこには何も必要ないんです。」

リーダは手袋を脱ぎ終わると、たった今郵便受けから持ってきたばかりの新聞を広げました。少し経って、リーダは静かに、はきはきと、自制しながらこう言いました。

「先週、アンナがお産のために亡くなったのですが、もし近くに救護所があったら彼女は一命をとりとめていたのです。風景画家であるあなた方は、このことに関して何らかの見解を持って然るべきだと思いますわ。」

「私はこのことについてとても明確な見解をもっています、そう断言しますよ。」と私は答えましたが、リーダはまるで話を聞きたくないかのように新聞を広げて私から隠れました。「私の考えでは、救護所、小学校、図書館、救急箱といったものは、既存の条件のもとでは民衆を隷属させることにしか寄与しません。民衆は巨大な鎖に巻かれているので、貴方はその鎖を断ち切ることはできず、ただ新たな鎖の輪を加えることになるだけなのです。貴方にお伝えする私の見解は以上の通りです。」

リーダは私に視線を上げ、小ばかにしたように笑いましたが、私は自分の考えの重要なところがぶれないように努めながら話し続けていました。

「重要なのは、アンナがお産で死んだことではありません。そうではなくて、重要なのは、そういうアンナやマーヴラ、ペラゲーヤのような人たちが、朝早くから真っ暗になるまで身を粉にして働いて、行きすぎた重労働のせいで身体を壊し、飢えた病気の子どもたちのことで一生おののき、死や病気を一生恐れては、一生治療を受け続け、早々に色香も消え失せて老け込んでしまい、汚れと悪臭の中で死にかけている、ということなんです。そうするとその子どもたちも、少し大きくなると同じような調子を帯びてくるわけで、そうして何百年経っても何十億もの人間が動物に劣る生活をしているんです。たった一切れのパン欲しさに、絶え間なく続

く恐怖を味わいながらね。彼らの境遇における悲惨さは全て、魂について思いを巡らす時間も、自分たちが神に似せて作られたのだということを出す時間もなく、飢えや寒さ、身の危険を感じるような恐怖、山のような仕事、これらがまさに雪崩のようにあらゆる精神的活動へと繋がる道を塞いでしまっていることなんです。ですが、まさにその精神的活動こそが人間と動物を区別し、そのために生きることこそが価値ある唯一のものでしょう。貴女は病院や小学校をつくることで彼らを助けようとしているのですが、そんなことでは彼らを拘束から解放できませんし、かえって彼らの奴隷化を促すだけです。彼らの生活に新たな先入観を持ち込むことによって、要求の数を増やしているんですからね。言うまでもなく、本代やらなんやらを自治会に収めなければならないということは、その分彼らは余計に働かなければならないわけでしょう。」

「私は貴方と言い争いをするつもりはありません。」とリーダは新聞を下げて言いました。「この話は聞いたことがあります。あなたに一つだけお教えします。手をこまねいてはいられませんわ。確かに私たちは人類を救済してはおりませんし、もしかすると多くの過ちを犯しているのかもしれませんが、私たちはできることをしているという点では正しいのです。文化人の最も崇高で尊い務めは、隣人に尽くすことであり、私たちはできる形で尽くそうと努めているのです。あなたは気に入らないでしょうけれど、全員を納得させることなどできませんからね。」

「そうよ、リーダ、その通りよ」と母親が言いました。

リーダのいるところでは母親はいつもびくびくして、話をしつつも不安そうにリーダを見ていて、自分が何か余計なことやふさわしくないことを言うことを恐れていました。そして母親は一度もリーダに反対したことはなく、いつも賛成していました。「そうよ、リーダ、その通りよ」と言って。

「百姓の教養や、つまらない教訓や洒落の載った本、救護所をもってしても、無教養や死を減らすことはできませんよ。あなたの家の窓から出た光がこの広大な庭を照らすことはできないようにね。」と私は言いました。「貴方は何も与えてはいませんし、ご自身の干渉によってこうした人々の人生に新たな要求と、新たな仕事の種を作りあげているだけですよ。」

「まあ、なんて事！だって、何かしらしなければいけないじゃありませんか！」と、リーダは忌々しそうに言いました。その口調から、リーダは私の議論を取るに足らないものだと軽蔑していることが分かりました。

「人々を重い肉体労働から解放するべきです。」と、私は言いました。「負担を軽減し、釜戸や飼葉桶のそば、畑で一生を過ごさなくてもいいように、息抜きさせなければなりません。そうすれば、彼らもまた、魂や神について考えられる時間を持てるでしょうし、自分たちの精神的能力をより幅広く発揮できることだってできるでしょう。どんな人間だって精神的活動を行う使命を負っているんです。絶えず真理や人生の意義を探究するという使命をね。荒々しい自分の身を危険に晒すような労働をしないで済むようにし、人々が自由だと感じられるようにしてあげてくださいよ。そうすれば、こんな本や薬箱がいかにか馬鹿げたものかが分かりま

すよ。いったん人間が自分たちの真の使命を自覚したら、自分を満足させてくれるものは宗教や学問、芸術のみで、こんなくだらないものによってではないことが分かるでしょう。」

「労働から解放するですって！」リーダは薄笑いを浮かべました。「そんなことができますか？」

「ええ、彼らの労働の一部を負担してください。もしも私たち都市の住民も田舎の住民も例外なく、一般的に人類の肉体的欲求を満たすのに費やされる労働を分配することに賛同していたら、私たちは各々一日 2-3 時間足らずしか働く必要はなくなっていたでしょう。我々みんなが、富める者も貧しい者も一日 3 時間だけ働いて、残りの時間が自由になることを想像してみてください。さらに、我々が自分の肉体への依存を減らし労働も減らすために、労働の代替となる機械を発明し、我々の欲求を最小限に抑えることを想像してみてください。我々は自分の子どもたちが飢えや寒さを恐れずに済むように自分と子どもたちを鍛えるのです。そうすれば私たちはアンナ、マーヴラ、ペラゲーヤのように絶えず健康を心配する必要がなくなるのです。我々が病気になって治療を受けることがなくなり、救急箱もタバコ工場も、アルコール蒸留所も持たないことを想像してみてください。最終的にどれほどの自由な時間が残ることになるでしょうか！我々全員でこうした自由時間を学問や芸術に捧げようではありませんか。百姓たちが時たま力を合わせて道を修繕するように、我々も皆で一緒に真実や人生の意味を探求できればどんなに良いか。真実がすぐに見いだせるはずですよ。人間は絶えず重苦しい死の恐怖から、さらには自分の死の恐怖からさえ免れることになるのです。それには自信があります。」

「でも、矛盾してますわ。」と、リーダは言いました。「科学、科学とおっしゃるのに、読み書きを教えることを否定なさるなんて。」

「読み書きといっても、ただ居酒屋の看板とか、分かりもしない本をたまに読んだりする程度の読み書きの能力なら、わが国ではリュウリックの時代からありましたし、ゴーゴリのペトルーシカだってだいぶ前からもう字が読めていたというのに、一方で田舎村はリュウリックの時代のまま、今の今まで取り残されているではありませんか。読み書きは必要ありません、必要なのは精神的能力を幅広く発揮できる自由の方ですよ。必要なのは小学校ではなく、大学なんです。」

「貴方は医学も否定なさるのね。」

「ええ。医学が必要だとするなら、自然現象として病気を研究するためであって、病気を治すためではありません。仮に治すにしても、それは病気そのものをではなく、病気の原因をでしょう。病気の主な原因である肉体労働をなくすことができれば、病気などなくなってしまうでしょうね。私は治療のための学問など認めませんよ。」私は、興奮しながら話し続けました。「学問や芸術というのは、それが本物なのであれば、目指すところは一時的、個人的な目的ではなく、永久的かつ全体的な目的、すなわち、真理や人生の意義、神や魂を探究することなんですから、そんな目的に対して、日々の要求や時事問題、薬箱や図書館なんかを結びつけてもしたら、人生を複雑にし、塞いでしまうだけです。世間には多くの医者、薬剤師、法律家がいて随分と教養が身に付きつつありますが、生物学者、数学者、哲学者や詩人は全くいません。あらゆる知恵や精神的なエネルギーは、一時的に必要なものを満たすために費やされてしまうのです。学者、作家、芸術家の仕事は忙しくなり、彼らのお陰で生活の利便性は日に日に向上するものの、物理的欲求は増え、そうしている間も真実からは未だ遠いまま、人間も従来同様最も強欲で不潔な獣のまま、あらゆる物事は人類の大多数が衰退し、永遠に全ての生活

能力を失う方向に向かっていくのです。こうした条件下では、芸術家の人生は意味を持つことがなく、才能ある芸術家であればあるほど、その役割は奇妙で理解しがたいものになります。なぜなら、実際には彼が既存の秩序を保ちつつ不潔で強欲な獣の気晴らしのために働くことになるからです。私は働きたくないし働かない……何も必要ない、大地が地獄に落ちれば良いのに！」

「ミシュシちゃん、あっちへ行っていて。」リーダは妹に言いました。どうやら私の発言が、あのようなうら若い女の子にとって有害であるとみなしたようです。

ジェーニャは悲しそうに姉と母親の方を見やると去っていきました。

「そういう素晴らしいことって、大抵の場合、自分の無関心を正当化したがる方がおっしゃいますわ。」と、リーダは言いました。「病人を治したり読み書きを教えたりするより、病院や小学校を否定なさる方が簡単ですものね。」

「本当ね、リーダ、本当ですよ。」母親が賛同しました。

「これからも働かないなどと貴方はおっしゃいますけど」と、リーダは続けました。「見たところ、貴方はご自分のお仕事を高く評価なさっているのでしょうかね。議論なんてやめましょう。意見が一致することなどないわ。だって、そうでしょう。たった今、貴方が散々軽蔑的なご意見を述べられた図書館や薬箱ですけど、私はあらゆる図書館や薬箱のうち最も不完全なものであったとしても、この世のどんな風景画よりも上だと思っているんですもの。」そして、リーダはすぐに母親の方を振り返ると、全く違う口調で話し始めました。「以前家にいらっしやったときよりも、公爵はかなりお痩せになって、随分とお変わりになったわ。ヴィシーの方へ派遣されるそうよ。」

私と話したくないがために、リーダは母親に公爵の話をしたのです。リーダの顔は火照っていたが、自分の興奮を隠すために、まるで近視の人のようにテーブルへと低く身をかがめて、新聞を読むふりをしました。私がいることが不愉快だったのです。私は別れの挨拶をすると、屋敷を出ました。

#### 4 章

中庭は静まり返っていました。池に面した村は寝静まっており、明かりの一つも見えず、池の水面だけあちこちで星々が反射して青白い光を放っていました。ライオンの像のついた門のところではジェーニャが私を見送ろうと、身動きもせず待ち構えていました。

「村では皆寝てますね」と私は暗闇でジェーニャの顔を眺めようとしつつ言うと、私に向けられた悲し気な暗い色の瞳に目を止めました。「居酒屋の主人も馬泥棒も静かに眠っているというのに、我々上流階級はお互いいらいらしながら言い争っているのだなあ。」

悲しい8月の夜でした。秋の気配を感じさせる香りがもう漂っていたので悲しかったのです。茜色の雲に覆われて月が昇り、かすかに一本の道とその周りに広がる暗い秋蒔き作物の畑を照らしていました。流れ星がひっきりなしに落ちていきました。ジェーニャは私の隣でその一本道を歩きつつ、流れ星が落ちるのが視界に入らないよう、空を見ないようにしていました。というのもなぜかジェーニャは流れ星が落ちるのを見ると不安になったのです。

「私、貴方は正しいと思います。」ジェーニャが、夜の湿った空気に震えながら言いました。「もし人々が皆一丸となって精神的活動に打ち込めたなら、どんなことだってたちまち分かっ

てしまうでしょうね。」  
「もちろんですとも。我々は最高の存在なんですから、もしも実際に我々が人間の才能におけるあらゆる力を自覚し、最高の目的のためだけに生きられたら、最終的に我々は神のようになれるでしょう。ですが、決してそうはなりません。人類は退化し、才能など跡形もなく消え去ってしまうことでしょう。」

門が見えなくなってくると、ジェーニャは立ち止まって慌てて私の手を握りました。「おやすみなさい。」と、ジェーニャは震えながら言いました。肩を覆っているのはブラウス一枚だったので、寒さで身をすくめていました。「明日もきてくださいね。」

私は、自分にも他人にも満足できずに苛立ったままの状態一人でされるのかと思い、怖くなりました。今や、私までもが流れ星を見ないようにしていました。

「もう少しだけ一緒にいてください。」と、私は言いました。「お願いします。」

私はジェーニャのことが好きでした。彼女が私に会ってくれたり、見送ってくれたり、優しげに、そしてうっとり私を見つめたりしてくれたからに違いありません。ジェーニャの青白いほどに白い顔、細い首筋、細い腕、彼女のか弱さや何もすることが無いさま、そして本の何と感動的で素晴らしかったことでしょう。では知性はどうでしょう？私はジェーニャにずば抜けた知性があるものと思っており、彼女の考え方の大きさに驚かされていました。というのも、私のことを嫌っていたあの厳しく、美しいリーダとは別の考え方をジェーニャがしていたからかもしれません。私は画家としてジェーニャに気に入られており、ジェーニャの心を自らの才能で勝ち取り、彼女のためだけに絵を描きたいと熱烈に思い、彼女のことをこの森、野原、もや、空焼け、そしてこの奇跡のような魅力あふれる自然を自分と一緒に支配している女王様であるように夢想しましたが、その世界の中で、私はこれまで自分が絶望的に孤独で、余計な人間であったのだと感じていたのです。

「もう少しここにいてください。」と私は頼みました。「お願いしますから。」

私はコートを脱ぐと、ジェーニャの凍える肩にかけました。ジェーニャは男物のコートを着て不格好で見苦しく見えるのを恐れて、笑い出してコートを投げ落としたのですが、その時に私はジェーニャを抱きしめ、彼女の顔、肩、腕にキスの雨を降らせました。

「また明日！」と彼女はつぶやき、夜の静けさを破らないように恐る恐る私を抱きしめました。「私たち家族にはお互い秘密なんてないのだから、もう全てをお母さまとお姉さまに話さなくては・・・ああ怖い！お母さまは大丈夫、あなたのことが好きだから。でもリーダは！」

ジェーニャは門に向かって駆けだしました。

「さようなら！」とジェーニャは叫びました。

それからしばらくの間、ジェーニャの走り去る足音が聞こえていました。家に帰りたくなかったし、遂に帰る意味もなくなったのです。私は物思いに耽りながらしばし佇んでいました

が、ジェーニャの暮らす愛おしく、素朴な古い屋敷をまた一目見たくて、そっと引き返しました。屋敷の中二階の窓が、まるで目のように私を見つめていて、全てを理解してくれているかのようでした。私はテラスの側を通過して、ローンテニス用のコート近くのベンチに座り、古いニレの木陰の暗闇の中、そこから屋敷を眺めていました。ミシュシの部屋の窓の中がパッと明るくなった後に、穏やかな緑色の光へと変わりました。ランプにシェードを被せたからでしょう。複数の人影が動いていました…私の心は、優しさ、静けさ、そして自分に対する満足感、つまり誰かに夢中になり、恋をすることができたという満足感で満たされていましたが、それと同時に、私がいるここからすぐ近くのあの屋敷の一室に、私を嫌っている、いや、私を憎んでいるかもしれないリーダが住んでいるのかと思うと気づまりを感じました。私は座ったまま、ジェーニャが出てくるんじゃないかとずっと待っていました。耳を澄ますと、まるで中二階での会話が聞こえてくるようでした。

1時間近くが経ちました。緑色の明かりは消え、人影が見え始めることはありませんでした。月はもう屋敷の上に高く昇っていて、眠りについた庭や小径を照らしていました。屋敷の前にある花壇のダリアやバラははっきりと見えるようになり、その花一つ一つまでも見えるようでした。随分と冷え込んできました。私は庭を出て、道で自分のコートを回収すると、急ぐともなく家へ歩き始めました。

翌日、食事後に私がヴォルチャニーノフ家にやってくると、庭へ続くガラス戸が開けっ放しになっていました。私は花壇の向こうの広場や並木道のどこかにジェーニャの姿が見えるか、部屋から彼女の声が聞こえるのを待ち構えてテラスに少し腰かけました。それから私は客間と食堂を通り抜けました。人っ子一人いませんでした。私は食堂から玄関に続く長い廊下を通り抜けると、また引き返しました。その廊下には扉がいくつかあったのですが、そのうちの1つからリーダの音が響いていました。

「カラスに、どこかで…神様が…」リーダは大きな声でゆっくりと喋っており、恐らく書き取りをさせているのでしょう。「神様がチーズをひとかけ与えてくださいました…。カラスに…どこかで…どなたですか？」私の足音が聞こえて、不意にリーダが声をかけてきました。

「私です。」

「あら！ごめんなさい、今貴方のお相手をしてもらえないの、ダーシャとお勉強中ですので。」

「エカテリーナさんはお庭でしょうか？」

「いいえ、母は妹と一緒に、今朝ペンザ県のお婆のところへ発ちました。冬は、たぶん外国へ行くと思いますわ…」少し黙ってから、リーダは言い足しました。「カラスにどこかで…神様が、チーズを、ひとかけえ、与えてくださいました…書けたかしら？」

私は玄関へと出てきましたが、何も考えることができずに佇み、そこから池や村を眺めていると、私のところに「チーズをひとかけ…カラスに、どこかで神様がチーズをひとかけ与えてくださいました…」という声が聞こえてきました。

こうして、私は屋敷の敷地内から初めてここへ来たときと同じ道を辿って、ただし来たときとは逆を辿りながら立ち去りました。まず中庭から果樹園へ出て、屋敷の脇を通り過ぎ、その後ボダイジュの並木道を通っていきました…そこへ一人の男の子が追いついてきて、メモを渡してきました。「姉に全て話したら、貴方とお別れするように言われました。」と書かれて

いました。「わがママを言って姉を悲しませることなど、私にはできません。貴方に神のご加護がありますように。私をお許してください。私や母がどれほど深く悲しんでいるか、分かってくださったら！」

あとは、暗いモミの並木道に、崩れ落ちた垣根・・・前にライ麦の花が咲き、ウズラが鳴いていたあの畑では、今では牝牛や足枷の紐のついた馬がうろついていました。丘の上では、秋蒔きの畑でところどころ緑色になっていました。酔いから覚めたような、日常の単調さに捉われた私は、ヴォルチャニーノフ家で自分が話したこと全てが恥ずかしくなり、以前と同様、生きることが退屈になりました。家に着くと、私は荷物をまとめ、夕刻にはペテルブルクへと発ちました。

それから私がヴォルチャニーノフ家の人々と会うことはありませんでした。どういう巡り合わせか最近、私がクリミアへ向かう列車の中でベロクーロフに会いました。彼は相変わらず長手のコートを着て刺しゅうの入ったシャツを着ており、私が元気かと尋ねると、こう答えました。「おかげさまでな」。私たちは夢中で話しました。ベロクーロフは自分の領地を売却し、リュボフ・イワーノヴナの名義で元より小さい別の領地を買いました。ヴォルチャニーノフ家のことについてベロクーロフが語ったのは少しだけでした。彼の話によると、リーダは相変わらずシェルコフカに住んでおり、小学校で子どもたちを教えているとのことでした。少しずつ彼女を慕う人々のグループを集めることに成功し、その人々が強い政党を作り、直近の自治会選挙では、郡全体をそれまで牛耳っていたバラーギンを落選させたのでした。ベロクーロフがジェーニャについて語ったのは、ただ彼女があの家には住んでおらず、どこにいるのか分からないということだけでした。

私はもう中二階の家でのことを忘れかけており、時折絵を描いたり読書をしたりしているとき、不意に、窓辺の緑色の灯や、恋に落ちた私が寒さでかじかんだ手を擦り合わせながら家路についているときに真夜中の野原に響いていた足音を思い出すくらいです。また、滅多にないですが、孤独に苛まれたり寂しさを感じたりするときも、ぼんやりと思い出します。そうすると、少しずつですがなぜだかこう思えてくるのです。私のことを思い出し、待っていてくれる人たちもいて、私たちは会えるのではないかと。

ミシュシ、君はどこにいる？